会員の広場

股野宏志監修

The Air——Song of the Earth——

APCE 5213, アポロン 1992年4月5日　2,800円

本誌1986年11月号の「総観気象学への招待」という解説の中に“「荒城の月」の間奏曲としての「1986年1月大循環メロディー」”という楽譜が掲載されていた．本会の機関誌に楽譜が掲載されるなどということは，絶後であるかどうかはわからないとしても，空前であることは確実で，音楽好きの会員の方々は多分よく覚えておられることと思う．その解説文の著者である股野さん（元大阪管区気象台長）が，とうとうCD（コンパクト・ディスク）まで出された．今年4月の読売新聞で紹介されているので，既にご存知の方もおられることと思う．

股野さんによると，500ミリバール天気図で，地球をめぐるコンターの蛇行をみていると，その蛇行から，時に，バッハのフランス組曲が，また時に，荒城の月が連想されるという．5,700メートルのコンターに目をつけて，これの南北方向の変動を経度0度を起点として経度7.5度毎にその位置の緯度を拾って五線紙の上に音の高低になおし，音楽的感性を加えてメロディーになるように仕立てる．このようにして得られたメロディーを基にして，NHKテレビ番組の「アインシュタイン・ロマン」の作曲を担当した篠原敬介氏が編曲したのが，ここで紹介するCDである．曲は全部で12曲あって，1．セント・スターライト，2．ダイヤモンド・ダスト，3．雪解け，など名前が付けられていて，この3曲は冬を代表する天気図を基にして作曲されている．以下，全て名前が付けられていて，3曲づつ，それぞれの季節を代表する天気図から作曲され，春，夏，秋の順に並べられている．演奏は，イオロスと呼ばれるグループによってなされており，全曲で演奏時間は57分7秒である．

CDケースの帯に「遙か上空5,000メートル，大気の流れが奏でる音楽」と記されており，テレビ朝日系のニュース・ステーションの天気予報のコーナーで使用されていた由である．ジェット・ストリームの蛇行に相当するものだけあって，非常におおらかに歌いあげられている．標題がついているので，つい，ヴィヴァルディーの四季や，ベートーヴェンの田園などを連想してしまって，時には激しさ，不安，暗さなどがでてくるかと想像してしまうが，それらは全く顔を出さない．正に文字通り環境音楽で，音量をおとしてBG音楽として流しておくと，頭の疲れなどいやしてくれるであろう．なお，作曲の過程などの少し詳しいことは，本誌1991年9月号の「本だな」で原田　朗さんが紹介している股野さんの「気象エッセイひまわり」に書かれているし，また，CDに付いているノートにも書かれており，最初にメロディーに仕立てた譜例も記されている．

股野さんは，少年の頃，作曲家・指揮者を志しておられたが，時に利あらず，当時日本の時代環境悪く，ミューズの神は股野少年にほほえみかけてはくれなかった．時代は大きくかわり，生の音楽に容易に接することが可能になり，また，楽器を手にする若者も多くなった．感性を磨き，基礎を身につけるのに，年齢的に時期というものがある．先日の「つくば」での学会の初日の夜，「気象学会音楽の夕べ」にお招きにあずかり，出席させていただいた．この集りは昨年秋の名古屋での学会の折に，始められたものの由であるが，今回は気象研究所の新野宏さんが呼びかけのお世話をして下さった．一人一人お名前をあげることは略させていただくが，声楽，ピアノ，フリュート，尺八，ハーモニカなどで，いずれも他人に聴かせるだけの立派な腕前をもった若い学会の会員の方々ばかりであった．出席者の中で私だけが老人で，あらためて育った時代環境の違いを認識させられた．もっと広く会員に呼びかけたら，演奏披露のできる方々がまだまだ多くおられることであろう．学会も第2日の夜は懇親会であるが，第1日の夜に，「気象学会音楽の夕べ」などというものが定着したら，学会出席の楽しみが増えることだろうと思う．CDの紹介に合せて，あえてここに紹介しておく．

（愛知学院大学　星合　誠）